

4月23日 第330回 「カンボジア教育支援15年を終えて」 12名

話題提供 平井花画さん（岐阜ユネスコ協会会長）

15年続けたカンボジア Study Tour を今年で終わられる平井さんに、教育支援について、その歴史をたどって話していただきました。

ユネスコは、教育・科学で世界の平和の実現を目指す組織です。1990年に「すべての人に教育を。釣った魚をあげるより、魚の釣り方を教えよう」の理念のもと国際識字年が設けられ、その運動をユネスコが担うことになりました。マイケル・ジャクソンが訪日した折の「コンサートの利益はすべて日本ユネスコ協会連盟に寄付したい。あなた方の活動が、giftではなく、co-action だから」の言葉は、平井さんに「ユネスコの活動は互いに学びながら行う活動なのだ」と気づかせたというエピソードや、アール・ゴア著『地球の掟』で、女性の識字率向上の大切さを学んだという話はとても印象的で、平井さんのユネスコ活動の原点に触れた気がしました。

また、2006年に青少年交流信託基金でインドへ3週間行ったとき、一緒に行った高校生が旅を通じて自分の学びを真剣に考えた姿に触発され、若者はきっかけさえあれば変わる！そんな機会を若者にたくさん提供したいと思ったことがカンボジア Study Tour に繋がったと話されました。

現地のユネスコ事務所とコンタクトをとりながらのカンボジアでの活動がたくさん紹介されました。アンコールワットから20分のところに不発弾、地雷原があり、地元の女性が処理に携わっています。また、やはり観光地から20～30分の中学校では収入がない、道がない、親が許さないなどの理由で入学した子の三分の一しか卒業しないという実情があります。ユネスコはそんな子どもを学校に戻したり、母親の教育などにも取り組んでいます。また、日本の若者が現地の大学生と交流したり、カンボジア人の大らかな国民性に触れることも大切にしてきました。

15年を終えた今、その成果と共に、世代間交流の大切さを痛感されているそうです。

10年間カンボジアに通ったという美容師さんも参加され、体験を話してくださいました。「カンボジアはゆったりしていて、行くととても癒される。日本はたくさん学校を作ったけれど、続いていないところが多い。舗装された道路は便利になったけれど、交通事故が増えたり、その近くの住人がそこに住めなくなったりと弊害もある。何度も行ったので友だちも増え、ネットワークも出来、美容師として自分らしい支援をしたい。」

その他、質問や感想がありました。「貧しくても子どもたちの表情が生き生きしている。日本の子どもたちと価値観が違うのだろうか？」 「物で支援するのではなく、現地の人気づいて自立する必要があるのでは？」 →（*平井さん回答。以下→は同じ）「物を持って行くのはいけないと知っていても、持って行かざるをえない現状。ノートを手にするだけで学びたいという動機付けになった」「男（自分）は上から目線になってしまう。女性はスゴイ」 「カンボジアで格差は？」 →「カンボジア政府はひどい状態。貧しくても借金をして

オートバイを買ってしまい、借金を返せず田畑をとられてしまうというケースもある。算数を生活に取り入れる必要がある」「不発弾処理を女性が行うということだが、事故はないのか?」→「日本の支援で行う不発弾処理は緻密で事故が一度もない」「なぜ若者を連れて行こうと思ったのか?」→「教育がないとどうなるのか。平和は大切だということを、若者に学んでほしい」「識字運動は、人を人間にする根本的なもの。日本でも、夜間中学で昔学ぶ機会を奪われた人々が学んでいる」

15年間、平井さんお疲れ様でした。なお、平井さんは今年11月3日に行われる「ぎふ平和のつどい」実行委員長も担われています。